



Title	沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究( 災害と呪術 ( 山里 ) )
Author(s)	高良, 倉吉; 山里, 純一; 豊見山, 和行; 真栄平, 房昭; 赤嶺, 政信; 狩俣, 繁久
Citation	
Issue Date	2008-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987</a>
Rights	

# 災害と呪術

山里 純一

## はじめに

現在は人工衛星やその他の科学技術の発達によって、災害を引き起こす地震や津波、台風、早魃などの原因や発生のメカニズムなどはある程度わかっているが、それでも完全な予知や対策は確立されておらず、また予想を超えた猛威によって、しばしば災害に見舞われる。また農薬の発明により農作物に付く害虫は容易に駆除できるようになり、虫害の脅威はある程度なくなっているが、逆に農薬を使用した農作物が人体に及ぼす悪影響が新たな問題となっている。

科学が未発達であった時代には、災害の防除に対しては超自然のものに祈るしか方法はなかった。小稿では災害に関わる呪術について見ていくことにしたい。

## 一 早魃と祈雨（雨乞）

沖縄地方が位置している緯度圏は中緯度高圧帯に属しているが、この高圧帯は年によって南北に移動したり、強かったり弱かったりすることがある。沖縄地方が小雨の年になったり、多雨の年になったりするのには、降水量に変動をきたすこの高圧帯の動きが原因と言われている<sup>(1)</sup>。また7月下旬から9月下旬に來襲する台風は風害だけでなく、時には恵みの雨をもたらす。したがって、小雨の年にあたり、かつ台風の接近が少ない年には深刻な水不足が生じ、早魃に陥る。

早魃は作物の植え付けに深刻な影響を及ぼすばかりでなく、せっかく育った作物にも被害が出て、凶作につながり、やがて飢饉に至る。特に台風襲来後に早魃が続くと二重の災害で大凶作、大飢饉となる。『球陽』によれば、尚貞王41年(1709)に3,199人、尚瀬王22年(1825)に3,358人、同29年(1832)に2,455人の餓死者が出たことが記されているが、それぞれ「颯颯屢々起り、早魃虐を肆にす」、「風旱相仍り饑饉荐りに臻り、人民多く饑餓に及ぶ」、「暴風大いに起り早魃虐を作し」とあるように、原因は台風の風害と早魃のダブルパンチであったことがわかる。

このような大飢饉に至らずとも、早魃は人々に深刻な不安を与えた。それは、三司官を勤めた伊江親方朝睦の日記『伊江親方日々記』からも推察しえるところである。すなわち『伊江親方日々記』には、嘉慶15年(1810)2月7日、同3月1日、同8月13日、嘉慶18年(1813)8月6日、同10月25日、嘉慶21年(1816)7月28日の箇所には、長期間雨が降らず「世上驚入候処」、雨が降り出し「世上喜悅」したことが書かれている。また嘉慶21年8月16日によれば、当時は隠居の身であったが、長期の早魃にもかかわらず、公儀の雨乞が行われないため、その理由を聞き出そうと、評定所の主取を自宅に招いてい

る。また同年9月11日の箇所には、自ら祈願のための願文を用意していたが、ようやく雨が降ったため祈願を取りやめたことも書かれている。伊江親方がいかに旱魃に気を揉んでいたかがうかがえよう。

旱魃を解消するには、祈雨ないしは雨乞を行い超自然的存在である神の力によって雨を降らせてもらう以外に方法はない。祈雨の際には願文を捧げたが、伊江親方が個人的に用意していた願文が『伊江親方日々記』に見える。

願文

千手観音御宝前

弁財天女御宝前

立願之時御供物

一 線香 一結

一 御花 一籠

一 御五水 一对

一 御燈明 一对

結願之時

一 線香 一結

一 御花 一籠

一 御五水 一对

一 御茶之子 一对

一 御燈明 一对

右旨趣者謹而奉願候者、今般之儀去六月比より旱魃ニ而雨降り不申、最早世上之用水相絶苗代田差支、其上畠方も相乾、飯料から芋虫相付、此涯雨降不申候へ者、大凶年之積ニ而、先様及餓死候者も出来可申哉与、世上之憂無此上由承、及至極驚入候、追々公儀向雨乞も被仰付筈候へ共、昼夜及心配難黙止、両御宝前様江奉願候、御仁愛を以早々雨降候様、御聖慮奉仰候、仍願文如件

丙子

九月

前

伊江親方

この願文では、苗代田に水が引けず、畠も乾燥して芋虫が発生し、このまま雨が降らないと大凶作となって餓死者も出るかも知れないと世間では憂い驚いており、自らも昼夜心配が収まることがない。供え物を捧げて奉願するので千手観音・弁財天女の御仁愛で雨を降らせて欲しいと切実な思いを述べている。

旱魃の際には、こうした個人による祈願だけでなく、雨乞が行われる。それは間切単位のものから王府主催のものまである。どのレベルの雨乞においても、祈願、雨乞歌、水かけはほぼ共通して見られるが、水かけはフレイザーの言うところの類似は類似を生むという類感呪術（模倣呪術）である<sup>(2)</sup>。大旱魃の時の王府雨乞では、龍潭における爬龍舟漕ぎや、山野の暴骨・屍骨を收拾し土に埋めることも行われた。

旱魃は即災害ではないが、旱魃→凶作→飢饉のパターンで災害となる。したがって祈雨や雨乞は災害に至る前の呪術的行為と見てよいであろう。

## 二 虫害と呪術

### (1) 年中行事の害虫払い

琉球王府時代から、稲の穂が出始める4月に「畔<sup>アツバツヒ</sup>払」と称される年中行事があった。『琉球国由来記』巻一「王城之公事」には次のように見える。

四月中、自<sub>二</sub>公所<sub>一</sub>撰<sub>レ</sub>日、於<sub>二</sub>間切<sub>一</sub>、其日<sub>二</sub>吉人、吉方<sub>一</sub>ニ向テ、払<sub>二</sub>去畔之草<sub>一</sub>而、国男女、俱<sub>二</sub>ニ二日、不<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>常之事業<sub>一</sub>、遊ブ也。是願<sub>二</sub>有年除<sub>二</sub>蝗蟲<sub>一</sub>之齋戒歟。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>考<sub>二</sub>其始<sub>一</sub>矣

すなわち「畔<sup>アツバツヒ</sup>払」は、各間切で吉日を選び、畔の雑草を刈り取り、2日間は仕事を休み、遊ぶ行事である。王府はこれを蝗蟲を除くことを願う齋戒の意味に捉えている。

今日でも各村にアブシバレーの行事がある。日にちは地域によって一定していないが、おおむね毎年4月の14、5日に行われている。

一方、ムシバレーという、鼠や蝗など田畑の害虫を集めて、藁やアダンや芭蕉などで造った舟に乗せて海や川に流す行事もある。2月から6月にかけて行われるが、アブシバレーと混同して行われている地域が多い。こうした「虫送り」は全国各地にあり、災厄を引き起こす原因となるものを境界の外に送り出し、それによって災厄からムラを守るというもので、これも模倣呪術の一種である。

### (2) 害虫除け呪符

久米島と多良間島と与那国島には多くの呪符を書き写した「呪符集」とでも称すべき資料が残されている<sup>(3)</sup>。その中に害虫除けに関する呪符が見える。

久米島の與世永家文書<sup>(4)</sup>には、「田畠ニ虫付ク時書テ立也」として次の十種類の符が書かれている。その立て方には秘伝があるとも付記されている。

- ① 札ニ書テ田ニ立ルナリ      ② 上(左)同      ③ 上(左)同      ④ 上(左)同

龍龍龍  
龍龍龍  
龍龍龍

女  
何  
弼

兩  
鬼

龍  
龍  
龍

⑤ 田島ニ用ナリ

致題那蛇波提婆娑訶

⑥ 此符ハ畠ニ吉

田口  
鬼

⑦ 田島ニ用ナリ

鬼目  
鬼天  
鬼目

⑧ 札ニ書テ田島ニ立ルナリ

唵摩訶吽呬多擲蛇波羅

⑨ 上(左)同

願  
鬼

⑩ 上(左)同

出  
鬼  
民  
拂  
出

このうち①と⑩は多良間島の『玉黄記』<sup>(5)</sup>にも、「唵々」の文字の入った同じ符が見える。

同じく久米島の吉浜家文書<sup>(6)</sup>には、「田に虫付時札」として次のようにある。

此字ヲビワノ葉ニ書テ田毎ニ立テ置可シ

𧈧  
𧈨  
𧈩  
𧈪  
𧈫  
𧈬  
𧈭  
𧈮

大正期に佐喜真興英が宜野湾の字新城の古老の「占書」から書き写したという<sup>(7)</sup>ものにも、これと同じ呪符や與世永家文書の⑦と同じ呪符が見える。

次に、与那国島の西銘家文書<sup>(8)</sup>には次のような呪符が見える。

田畠虫入ノ符

厩  
厩  
龍龍龍  
急  
急  
々  
々

田ニ虫付時立符

①	②	③
𧈯	五	𧈰
九	穀	𧈱
辨	豊	消
急	饒	滅
々		
々		
々		

以上のように、偶然にも離島にのみ現存しているが、これらの呪符集が伝えられた家は、かつて地域の指導的立場にいた人の家筋である。文書の所持者はサンジンソウ（易者）を生業としていたわけではないが、地域においては呪術の知識を用いて人々の悩みの相談に応じていた人であったようである。いずれにしてもこれらの呪符集は近世から近代にかけて写されたものと推測されるが、その経緯についてはわからない。

### (3) 呪符木簡の出土例

「那覇新都心」の銘苅直禄原遺跡から出土した木製品の中に、右のように墨書の跡がレリーフ状に残るものがある。

『木簡研究』22号における釈文には「五穀豊穰□□□□ [急々如律令カ]」とあるが、西銘家文書によれば、「五穀豊穰」は「田ニ虫付時立符」の呪句として用いられており、この木簡も同様の呪符木簡であった可能性は高い。そうなるとわずかな文字の輪郭からして、下の文字は、「律令」の文字の輪郭からして「急々如律令」と書かれていた可能性は高い。

那覇市教育委員会の発掘報告書によれば、グスク土器や青磁劃花文皿、青磁鎬蓮弁文碗が出土していること、またこの遺跡の層序はⅠ～Ⅴ層に大別されるが、近世以降の遺物が含まれないことなどから、遺跡の年代は13世紀～15世紀の範疇に属すると見られている<sup>(9)</sup>。

またこの木簡の樹種はスギ科スギ属スギに同定されている。沖縄には自生しない樹木が用いられているということは、この木簡は日本から持ち込まれたものか、日本から取り寄せた杉板材を用いて琉球で作製されたものであろうが、後者の方が現実的である。

時代は下るが、『球陽』附巻一の尚質王5年(1652)には、元臨濟宗の建善寺住僧、南陽紹弘禪師の伝記が参考になる。彼は13歳で出家し、19歳の時に日本に行き、16年間放浪の末、奥州松島の瑞岩(巖)寺で修道すること四年、その後帰国し建善寺住僧となる。数年間住持するが世俗を嫌い北谷の玉寄村に隠居する。専ら坐修に身を置き寡黙ではあったが、病人が出て符をもとめられれば符を与え、田に虫災があった時はまた符を施してそれを取り除き、村人から北谷長老として慕われたという。

彼が符を用いたのは僧侶時代の経験に拠るものであろう。したがって「五穀豊穰」呪符木簡も僧侶との関係を推定するのが穏当であろう。

『球陽』によれば、1384年に日本から渡琉し護国寺を開いた頼重法印が入滅したとあり、頼重法印がおおよそ14世紀後半頃、琉球に真言宗を伝えたことが知られる。また尚巴志が正統3年(1438年)に中国に送った文書(『歴代宝案』第一集巻17)によれば「本国十刹」と見え、当時の琉球国には十カ寺が存在していたようである。その後、1456年には京都から来琉した芥隠禪師によって臨濟宗も伝えられている。そうした寺院の僧侶の誰かが、虫害から作物を守るため、恐らく何らかの使用目的があつて日本から取り寄せストックされていたと思われるスギ材の木切れを利用して「五穀豊穰」呪符木簡を作製せしめた



呪符木簡  
(銘苅直禄原遺跡出土)

のであろう。

### 三 地震と呪文

地震が起きた時に、地震が早く止み被害が出ないようにと呪文を唱える。江戸時代には「ササヤカ、ササヤカ」あるいは「世直し、世直し」と唱えた。現在も日本の各地で地震の時の呪文が伝えられている。例えば高知県や愛媛県では「カー、カー」、岡山県では「トートー、トートー」、奄美の瀬戸内町では「ユリミチ、ユリミチ」などと唱えるという。

沖縄では「キョウツカ、キョウツカ」と唱える。地域によって「チョーンチカチカ、チョーンチカチカ」（那覇市）、「チョージカ、チョウージカ」（嘉手納町・西原町）、「トーチカチカ、トーチカチカ」（伊是名村）、「ツカツカ、ツカツカ」（石垣市）などとバリエーションがあるが、これらはすべて「キョウツカ」から派生したものである。

しかし、この「キョウツカ」という呪文は必ずしも沖縄だけではない。宮崎県や種子島でも「キョウツカ」と唱えるようである。

呪文「キョウツカ」の語源については二通りの考え方がある。一つは「京の塚」と解し、京都の「將軍塚」ないしは京都に近い「田村將軍塚」に由来するというものである<sup>(10)</sup>。いずれも鳴動の記事が多く残されている<sup>(11)</sup>。もう一つは経典を埋納したところ、すなわち「経塚」に由来するというものである。それは弥勒下生の56億7千万年後に地が揺らぎ経が湧出し、この世が救われるという弥勒信仰に基づく<sup>(12)</sup>。

ところが沖縄では、浦添に立てられた経塚の碑に付会されている。経塚の碑とは、『琉球国旧記』および『琉球国由来記』に、浦添から首里に通ずる大道の側の松林に妖怪（または「悪魔」）が出没するというので、日秀上人がお経を小石に書写して埋め、「金剛嶺」の銘を書いた碑を建てたところ、以後「妖怪」は出なくなったと見える「金剛嶺」碑のことである。この碑が大地震でもびくともしなかったため、地震の時「キョウツカ」と唱えるようになったという<sup>(13)</sup>。「金剛嶺」の碑の建立は『琉球国由来記』が成立する1713年以前で、それ以降に沖縄本島を襲った地震はいくつか記録に残っているが（本報告書の高良倉吉「琉球災害史略年表」参照）、「金剛嶺」の碑が崩落しなかったという伝承がいつの大地震のできごとであったかは伝えられていない。いずれにしても「キョウツカ」の呪文そのものは九州にもあるが、琉球においてはいつの頃か独自の由来譚が付会され、それが今日まで伝えられている。

### おわりに

災害の要因となる旱魃、虫害、地震に関する呪術について見てきたが、これらはいずれも災害時に行われるものではなく、災害になる前の段階での防除的なものである。旱魃、虫害、地震は現代の技術をもってしてもその発生を未然に防ぐことはできない。呪術的行為は、災害の要因となる自然現象が発生しても、それが災害に至らないよう超自然のものの力を借りる対処法に他ならない。



注

- (1) 高良初喜・佐々木正和『沖縄の気象と天気』（むぎ社、1990年）
- (2) J・G・フレイザー『金枝篇』（翻訳本は、神成利男訳・石塚正英監修『金枝篇』（国書刊行会、2004年）を参照した）
- (3) 拙著『呪符の文化史』第IV部「資料『呪符集』」（三弥井書店、2004年）
- (4) 與世永家文書は、上江洲家の分家で、初代智昌、二代智憲が連続して久米島の地頭代を勤めた與世永家に伝わる文書群ある。
- (5) 多良間島の仲本家に伝わった呪符資料である。
- (6) 吉浜家文書は、主として吉浜智改氏（1885年生まれ）が作成および筆写・収集した文書から成る。智改氏はサンジンソウの経験を持つ。
- (7) 拙著「佐喜真興英収集のまじない資料」（『沖縄の魔除けとまじない』所収、第一書房、1997年）
- (8) 西銘家文書は、八重山の蔵元から久米島に赴任してきた役人が持ち込んだものと伝えられている。
- (9) 那覇市文化財調査報告書第57集『銘苅直禄原遺跡』（那覇市教育委員会、2003年）
- (10) 今村明恒『鯨のざれごと』（三省堂、1941年）、C・アウエハント『鯨絵』（〔復刻〕せりか書房、1989年）
- (11) 笹本正治『鳴動する中世 - 怪音と地鳴りの日本史 - 』（朝日新聞社、2000年）
- (12) 宮田登「ミロクと日和見」（『日和見 - 日本王権論の試み - 』所収、平凡社、1992年）
- (13) 東恩納寛惇『南東風土記』（『東恩納寛惇全集』7、第一書房）、島袋全発「首里のまじなひ（『南島談話』三）

（やまざと・じゅんいち 琉球大学法文学部教授）